

長い夢のあとで

—ゴトーは、旅の終わりに—

作 やのひでのり

ver. 2.0

登場人物

サトウ

ゴトウ

ミュッキ

ピアニスト (歌手)

場 月面のバー

何もない空間。

ピアニスト（歌手）が演奏している。

中央にイスが2つ。上手に一つ、下手に一つ。離れた位置に置 いてある。

その一方にゴトウが座っている。

息を切らしながらサトウ登場、辺りをみまわす。

サトウ すみません。

ゴトウ えっ。

サトウ 今、何時でしょうか。

ゴトウ ……。

サトウ 今、何時か分かりますでしょうか。

ゴトウ （腕時計を見ながら）お昼前だと思うよ。

サトウ はあ。

サトウ、イスに座り、煙草に火をつけようとする。

サトウ すみません、火あります？

ゴトウ 俺は吸わないんだ。（口をとがらして）他の物なら毎日 吸ってるけどね。

サトウ ……。

間。

サトウ お待ち合わせですか？

ゴトウ ん？ んん、（小さく）いや。

サトウ お待ち合わせなんですよ。

ゴトウ んん。いや。

サトウ からかっているんですか。私を。

ゴトウ 待ってることにはまちがいないんだよ。でも、待ち合わせ じゃない。つまり、待ってるだけなんだ。

サトウ あなたはゴトーさん？

ゴトウ （驚いて）何をいうんだ！

サトウ ……。

間。

サトウ 今、何時でしょう？

ゴトウ 十一時三十分だ。なぜって、まだ、昼飯を食べてないから ね。昼飯を食べたなら十二時過ぎだ。でも、今は腹がへっている のに何も食べていない。だから、十一時半だ。

サトウ あなたは時計を持ってるんでしょう。

ゴトウ ああ、あるよ。

サトウ 正確な時間を教えていただけますか？

ゴトウ だから十一時三十分だ。まだ昼飯を食べてないからね。も ちろん昨日の昼飯はとっくにくちまったよ。

サトウ ……あなたはゴトーさん？

ゴトウ いや。

サトウ 本当に？

ゴトウ 違うね。

サトウ そうですか、違いますか……。すみません、ちょっと似 てると思ったものですから。もう何年も会ってないのもので、こ こで会う約束をしたのですが。

ゴトウ 約束の場所はここなのかい。

サトウ はい。

ゴトウ 時間を間違えたんじゃないか？

サトウ とんでもない！

ゴトウ だったら日にちを間違えたんだよ。
サトウ (ひどく驚く) えっ。・・・たぶん(自信なさげに)まちがってないと思います。
ゴトウ 間違えたんだよ。
サトウ でも、今日に間違いはないと思います。夕焼けのきれいな日が三日続いてそのあと暖かい日が二日続いて雨が降った日の次に と、約束したのです。また会いましょうと。
ゴトウ なるほど昨日は雨が降った、おとといは暖かかった。しかし、さきおとといは寒かっただろ。
サトウ 寒かった?・・・いや、暖かかったですよ。
ゴトウ 寒かったよ。
サトウ 暖かかったです。
ゴトウ そうか。それじゃ、俺の勘違いだ。約束の日は今日かもしれないな。

サトウ、辺りを見回す。

サトウ ここはいったい・・・もしかして、場所を間違えたのかも・・・。
ゴトウ 6階だ。ここは。
サトウ 6階?
ゴトウ そう、1階は普通の喫茶店さ。2階、3階はキャバレーになっている。4階は貸し切りさ。一度間違えて降りたことがあるんだが、「ピリピ人への手紙」なんかがテーブルで流れてたな。5階には大きな川が流れている。そしてここが6階だ。
サトウ・・・。
ゴトウ 俺はこの上の7階で詩の学校の先生をやっている。君もよかったら一度遊びに来いよ。
サトウ いや、私は・・・。
ゴトウ (笑う) 実は俺も、ここで人を待ってるんだ。もう何年になるかな。未だに現れない。
サトウ 約束はされたのですか。
ゴトウ したよ。
サトウ いつです?
ゴトウ 別れるときに。
サトウ 毎日ここに?
ゴトウ そうだ。毎日ここにきている。
サトウ どうして。
ゴトウ 忘れてしまったんだよ。約束の日をね。少し前は覚えていたんだが、どうしても思い出せなくなってしまった。でも、俺は どうしても彼に会いたい。会わなくてならない。
サトウ その・・・彼ですか・・・その人はあなたの何なんですか?
ゴトウ・・・。
サトウ いや、立ち入ったことをきいてしまいましたか。すみません。
ゴトウ いや、いいんだ。忘れてしまったんだよ。彼が何者であつたかも。でも、彼と別れるときには、俺ははっきりと憶えていた。彼の姿も、喋った言葉も。彼は、もう一度会おうと言った。そこまでは憶えているんだけどね。・・・。解らない。なぜ俺がこんなに会いたいのか。俺とはどういう関係だったのか。思い出せない。でも、俺は彼に会わなきゃいけない。そういう気がしてならない。毎日毎日、何だか居ても立ってもいられない気分なんだ。
サトウ あなたはゴトーさん?
ゴトウ 一。

一瞬あたりがまぶしく包まれ、暗転。

場 地下室

サトウとゴトウは汚れたシャツを身にまとい、汗まみれになりながら登場。
ゴトウは片足に怪我を負っている。

サトウ (おびえながら) なんなんだよ。なんなんだよお前は！ てめえ何年この仕事やってやがるんだ！ おめえのせいだよ。おめえがしくじったからだよ。俺はなあ、おめえの尻拭いをするために雇われたんじゃないやねえ！

ゴトウ (痛みに耐えられず叫ぶ) ああ！

サトウ (おびえながら) 組織からおめえを紹介されたときいやな予感がしたんだよ。こんなことならひとりでやりゃーよかったよ。こんな仕事、俺ひとりで充分だったんだ。それをてめえ、しくじりやがって！

ゴトウ うう (うづくまる)

サトウ なんで殺れねんだ！ 警備員のひとりもよ！ おめえのせいだよ。おめえが奴を生かしておいたからだ。俺まで死ぬとこだったんだぞ。足の怪我ですんだのが不幸中の幸いだと思え。奴はいまごろサツのところで俺達の似顔絵でも書いてるにちげえねえよ。…… (深くおびえる) 畜生！

怖いのはサツじゃねえぞ！ 俺達はしくじったんだ！……

ゴトウ ああ (苦しがる)

サトウ、少し落ち着いて。

サトウ 俺はな。この仕事が終わったら足を洗うつもりだったんだ。これが最後だって言うのに。

ゴトウ …… (サトウをにらむ)。

サトウ お前、生まれはどこだ？

ゴトウ ……

サトウ どこかかってきいてるんだよ！

ゴトウ 知らねえよ。……。両親は早くに死んでしまった。親の顔すら覚えてねえよ。親戚中たらい回しにされてな。行き着いたところっていうのが福岡の田舎の施設さ……。それからは……についてねえよ。

サトウ ……

ゴトウ 悪かったよ。始末すりゃーよかったんだろ。俺だってな。素人じゃないさ。殺ることなんてなんでもねえけどよ。ちょっとさ。いつもいつもやってることなんだけどさ。今日はちょっと調子が悪くてな。ためらっちゃったんだよ。

サトウ なに甘ったれたこと言ってるんだよ。俺だって親の顔なんざ見たこともねえし、おめえと同じ立場さ。

畜生！ 今ごろ俺たちを血眼になって捜してるさ。敵も味方もよ。

まったく俺はついてねえよ。怪我人までかかえちまってな。

ゴトウ 逃げろよ。

サトウ え。

ゴトウ 俺を置いて逃げりゃいいだろ。

サトウ 逃げるさ。逃げてやるさ。俺にはまだやる事がたくさんあるんだ。やり残したことが山ほどあるんだ。

ゴトウ 早く消えろよ。俺は足手まといだからな。

サトウ うるせえ！ 今動くと捕まるだろうが。

ゴトウ 行けよ。はやく行かねえと朝になっちまうぜ。明るくなる とよけいにめだつ。

サトウ 黙れ！ そんなことは分かっている。

サトウの苛立ちがつのる。

サトウ なんでだ！ なんで殺れねんだ！ おめえだってもう何人も殺ってきてるはずだ。警備員の一人殺ろうが二人殺ろうが同じじゃないやねえか。

ゴトウ ……殺れるさ。俺だって、今まで何人殺ったか憶えてないくらいだ。でも今回ばかりは……。奴の身ぐるみはがそうとしたらよ。写真が出てきやがったんだよ。思っても見なかったよ。

こんなことで殺れなくなるなんてな。安っぽい人情芝居みたいだけどよ。奴が持ってたその写真に……。ガキが写ってったんだ……。

サトウ ガキ？ それでおめえ・・・。

ゴトウ 俺だって素人じゃない。わかってる。こんなこといままで 考えたこともなかったよ。でも突然なんだ。おめえだってあるだろ。なんか突拍子もないこと思い出すことってあるだろ？

しわくちやになったガキの写真を奴は肌身離さず持ってた・・・。祈りの時間くらい与えてやりたくなつたんだよ。なんだかよくわからねえけどさ、あのガキが俺と同じように一。

サトウ てめえ自分の立場が分かってんのか？ 俺達はしくじったんだ。この事は今ごろ組織に伝わってる。しくじったからには許されねえ。俺達は生きてははいられねえんだよ。お前が人情物語をしゃれこんだ代わりに俺達が殺られる。なんてお人好しの大馬鹿野郎なんだおめえは。みんなそうだ、他人に同情する奴は生きてはいけねえ。他人に気を許すと必ずこっちが殺られる。やられる前にやれ！

それで俺は今まで生き延びてきたんだ。ガキの頃からずっと。施設にいるときから俺は他人なんか信用しちやいねえ。今までに おめえみたいな馬鹿はたくさんみてきたよ。でもみんな押しつぶされて死んじまったよ。

いいか！ 他人を信用する奴は死ぬしかねえんだよ！

ゴトウ ……。

間。

サトウ 福岡のどこだ？

ゴトウ え。

サトウ 福岡のどこの施設にいたかって聞いてるんだよ。

ゴトウ 直方（のうがた）だよ。

サトウ 直方？・・・。

ゴトウ ……。

サトウ お前・・・ゴトウか？

ゴトウ ……。

サトウ おめえ・・・ゴトウ・・・生きてたのか？

ゴトウ ……。

サトウ やっぱりゴトウだ！ 鼻の横の小さなほくろ、どっかで見たことあると思ってたんだ。俺だよ、サトウだ。憶えてるだろ捜したぜ。

ゴトウ サトウ・・・？。

サトウ そうだよ。サトウだよ。サトちゃんだよ。ゴトちゃんだろ！ な、ゴトちゃん。

ゴトウ 違う。俺はゴトウなんて名前じゃねえ。お前だって知ってるはずだ。

サトウ なにを言ってるんだ。組織の中じゃ誰だって偽名じゃないか。

ゴトウ、ゴトちゃんやろ？ 会いたかった。ゴトちゃん！

ゴトウ しらん。

サトウ テンでおつむをテンテンテン。パイでお胸をパイパイパイ ポンでお腹をポンポンポン。チンでおまたをチンチンチン。

（踊る）

テンパイポンチン、テンパイポンチン。

ゴトウ （一緒に踊ってしまう）あ。

サトウ やっぱりお前たい。ゴトウたい。会いたかったとよ。

ゴトウ あ、ああ。

サトウ こげんところで会うとは思わなかった。なつかしか。

ゴトウ ……。

サトウ ……ゴトちゃんあの日のこと気にしとるんね。ええよ。もう。あの晩のことはもう。

ゴトウ あの晩？・・・。

サトウ そうたい。あの火事の晩たい。

ゴトウ ……。

サトウ ゴトちゃん。忘れたとは言わせんとよ。

ゴトウ そんなもの憶えてなか。（言い直す）憶えてるわけねえ。15年も昔の事だ。

サトウ ゴトちゃん。ほんとにゴトちゃんたい。（飛び跳ね喜ぶ）

そうたい。あれは15年前たい。

ゴトウ あ、ああ。

サトウ あの火の中をゴトちゃんの背中に負ぶさりながら俺、思ったとよ。ゴトちゃん、しかおらん

って。俺はゴトちゃんと死ぬまで一緒におろうって。

サトウはゴトウを抱きしめる。

ゴトウ やめんしゃい。

サトウ 遠慮せんと。

ゴトウ ほんとにやめんしゃい。なにしよう。俺はそんな趣味な かったい。

ゴトウ、サトウを突きとばす。

サトウ ……あのあとどうなったか知つとうと？ おまえすげえ 心配かけとったとよ。

ゴトウ ……。

サトウ ケイちゃんが言つとったと。最後に火の中に飛び込んでい ったんはお前って。そりゃそう たい、お前は俺の命の恩人やから ね。でも、ケイちゃんはかわいそうたい。お前のこと好いとった けんね。

ゴトウ ケイコ、今なにしようや。

サトウ 知らんっちゃそんなもん。お前、勝手におらんようになっ てなんばいいよらすとね。施設は 無くなって、みんなバラバラた い。

ゴトウ バラバラ？

サトウ しょうがなか。俺たち帰るところなんかどこにもなかった たい。また別の施設めぐりばし て。ケイコはちょうど16だった けんちょうどよかったと。

ゴトウ ……。

サトウ 適当に男見つけてどっかいってたい。…あのあばず れが。

ゴトウ ケイコのことを悪くいうのはやめれ。そんな娘じゃないっ たい。

サトウ 知つとうと！ そんなこと百もしつとうとや！ 俺だって ケイコのことならお前よ り…まあ、よか。終わったことたい。

サトウ、懐からけん玉を取り出す。

ゴトウ なんね。

サトウ けん玉たい。

ゴトウ 何でそんなもの。

サトウ お守りたい。

ゴトウ お守り？

サトウ 覚えとう？

ゴトウ ……。

サトウ ゴトちゃんを買ってくれたとばい。みんなで太宰府行つた とき。

ゴトウ ……。

サトウ、けん玉で遊び始める。

ゴトウ サトちゃん。

サトウ ……。

ゴトウ サトちゃん。

サトウ なに？

ゴトウ 俺にもやらしてくれんと。

サトウ ああ。

サトウとゴトウはけん玉に夢中になる。

突然、正面から鉄のドアが開く音がする。

刺客だ。

サトウ、反射的に物陰に隠れる。

ゴトウは呆然とたちつくしてしまう。

ゴトウ よせ。よしてくれ。もう一回だけチャンスをくれ。俺だつ て今まで、お前らのために命張つ

てきたんじゃないか？

頼む。許してくれ。ああ、止めてくれ。

銃声。

ゴトウ倒れる。

サトウは物陰に隠れたままゴトウをみつめる。

やがて刺客は去る。

サトウはゴトウの側により、抱きかかえる。

ゴトウは息も絶え絶えだ。

サトウ ゴトウ、ゴトウ！ あの火事の晩からいなくなっちまった。施設が燃えて、跡形もなくなっちまって・・・俺は焼け跡を必死 になって捜したよ。でもお前は見つからなかった。

だけど、俺にはすぐわかった。お前は焼け死んだんじゃない。お前は生きてるって。

でもなんでだ。なんで俺の前から姿を消してしまったんだ。俺たちはずっと一緒だって誓い合ってたじゃないか。

そりゃ直方の施設はひどかったよ。でも逃げるときは一緒だって 言ってたじゃねえか。

なんでだ！ 信用してたんだ。世の中でただ一人信用できる、腹 の底から、心の底から打ち明けられるやつがおまえだったのによ。 親も兄弟もない俺が頼りにできる唯一の人間だったのによ・・・

・施設は燃えちまったし、俺には行くところがなくなったんだ んだ。俺は、辛かったよ。

どうして、お前は俺の前から消えちまったんだ。なぜなんだよ。 なぜなんだよ。

ゴトウ サトウ・・・あのときの火事は、あのときの火事は・・・。

ゴトウ、何かを喋ろうとしている。

サトウ なにをいってるんだ。

ゴトウ あのときの火事は・・・俺が、つけたんだ。あれは俺がつ けたんだよ。

ゴトウ、死ぬ。

サトウ ゴトウ！

場 月面のバー

ピアニスト（歌手）が演奏をしている。
ミュッキ、登場。

ミュッキ あああ。（あくびをしながら）なんだい。まだ、誰も来てないじゃないか。せっかく徹夜でやってきたのに。つまらないの。

ゴトウ、登場。

ゴトウ おお、来てるか。

ミュッキ 遅いよ！

ゴトウ すまん、いろいろあってな。

ミュッキ 宿題、やったよ。

ゴトウ そうか、見せてみる。

ミュッキ 君が先だよ。遅れてきたんだから。

ゴトウ そうか。

ミュッキ さあ、みせて。

ゴトウ ああ、何を見せるんだったっけ。

ミュッキ 詩だよ。

ゴトウ 詩？

ミュッキ 宿題だったろ。お互いに見せあおうっていったのは君だよ。

ゴトウ ああ、そうだったな。

ミュッキ 早く。

ゴトウ ああ、ちょっとまってろ。

ゴトウは、詩を取り出す。透明のケースに、なにやらもじゃもじゃと毛虫のような物がいっぱい詰まっている。

ミュッキ なにこれ？

ゴトウ 詩だ。

ミュッキ これが詩？

ゴトウ そうだ。

ミュッキ どこをみればいいの。裏、それとも表。

ゴトウ 全部だ。

ミュッキ 詩なんて……。どこに書いてあるの？

ゴトウ（笑う）お前のもみせてくれないかな。

ミュッキ ……ああ、いいよ。

ミュッキ、紙を取り出し、渡す。

ゴトウ 「ぼくは訊ねる。

—ロバとピアノはどっちが高い？

おじさんは答える

—ピアノだよ。

じゃあ、ピアノと詩集はどっちが高い？

ものにもよるけど……」

ミュッキ どう？

ゴトウ お前の詩って言うのは、この文字のことをいうのか。

ミュッキ そうだよ。

ゴトウ 他には？

ミュッキ ほかにって、そこに書いてあるだけだよ。

ゴトウ ふうん。……単純だな。

間。

ミュッキ ねえ。君はここにくるまえ何をやっていたの。
ゴトウ さあ。・・・でも、今はしがない詩の先生さ。
ミュッキ じゃあ、詩人なんだね。
ゴトウ そうじゃない。書き方を教えてるだけだ。詩が書けるわけ じゃない。
ミュッキ そうなの。
ゴトウ うまい詩が書けるんなら、とっくに詩人になっているから ね。
ミュッキ ふうん。

間。

ミュッキ いい天気だね。
ゴトウ ああ、いい天気だ。
ミュッキ 星もいっぱい出てるしね。
ゴトウ ああ、いっぱいだ。
ミュッキ あの星、何ていうか知ってる？
ゴトウ 北斗七星か？
ミュッキ うん、その隣は？
ゴトウ んー、北斗七星。
ミュッキ じゃ、その隣は？
ゴトウ だから北斗七星だろ？
ミュッキ 違うよ。あんた星って言えば北斗七星しか知らないんじゃないの？ もっと右だよ、あれあれ。
ゴトウ 北斗七星っていうのは、星が七つあるから北斗七星ってい うんだぞ。お前、ひしゃくの端から順に指していったんだから全 部北斗七星でいいんじゃないか。
ミュッキ ちがうよ。最初に指したのは北斗七星だけど、次は北極 星、その次はカシオペアだよ。
ゴトウ おまえ星に詳しくなったな。
ミュッキ まあね。勉強したからね。
ゴトウ 北斗七星というのは実はよくみると星が八つあるって知っ てるか。
ミュッキ そうなの。
ゴトウ そうだ、よくよくみると見える。これは大昔、エジプ トで兵隊の採用試験で使われたんだ。視力を試すのにね。八つ目 の星が見えない者は目が悪いということで不合格になった。
ミュッキ でも、どう見てもあのひしゃくは八つあるようには見え ないな。僕は目が悪いの？
ゴトウ ここじゃ、無理だよ。空気が汚れているからね。もっと山 奥の空気の澄んでいるところに行かなきゃね。天の川だって流れ 星だってよく見えるよ。
ミュッキ ブラックホールだってみえるの。
ゴトウ ブラックホールは星じゃないだろ。
ミュッキ え、そうなの。
ゴトウ 昔は星だったんだけどね。
ミュッキ どういうこと、それは。
ゴトウ いわゆる星の最期の姿ってことさ。星だって生き物なんだ。太陽だって年々大きくなって いるんだよ。どんどんどんどん大き くなる。そのうち地球をのみこんで、太陽系の星全てをのみこむ 位大きくなるんだ。あまりにも大きくなってしまって太陽自身の 重さも想像できないくらい重くな ってしまう。そのうち耐えられ なくなるんだ。自分自身の重さにね。そしてある時、突然崩れ始 める。太陽は自分の重さに耐えられなくなって、自分自身にが押し つぶされてゆくんだ。地球をのみこ むほど大きく成長した太陽 がついには人間の小指の先ほどの大きさまで押しつぶされてしま う。こんなにちっちゃくなっちゃうんだ。地球より何百倍も大き かった物がぎゅっと小さくなって人間の 小指の先ほどの大きさに しかならないなんて不思議だよ。あまりに強く凝縮されちゃっ たん で、ここでは光さえ進むことができない、時間さえ進む ことができない。時間が動いていないん だ。ずっと止まったまま なんだ。それがブラックホールさ。星の最期の姿なんだ。時間は 止まった まま、流れることができない・・・。
ミュッキ なんか、寂しくなってきた。・・・。
ねえ、太陽って大きくなるんでしょ。じゃあ、僕の子孫はいずれ は太陽にのみこまれて死んじゃう ってこと？
ゴトウ 大丈夫。何万年、いや、何10万年も先のことさ。おまえ の孫ぐらいは全然平気。そういう計

算さ。

ミュッキ そんな計算いつしたのさ？

ゴトウ 俺がやったわけじゃないさ。昔、アインシュタインとかホーキングとかいう人達がやったんだ。

ミュッキ ホーキング？ 靴？

ゴトウ え？

ミュッキ いや、それよりそのホーキングとかアインシュタインとやらはちゃんとした人なんでしょうね。そいつがいい加減だったら僕の子孫がかわいそうさ。

ゴトウ ちゃんとした人だよ。

ミュッキ 本当に？

ゴトウ 世界的にもちゃんとしてるよ。

ミュッキ そうか。なら安心した。

ゴトウ 相対性理論って知ってるか。

ミュッキ ソウタイセイリロン？

ゴトウ そうだ。例えば、時間だ。時間は絶対じゃない。俺がご飯を食べる時間は12時だ。それより前は11時半だ。待ち合わせだってそうさ。例えば昨日雨が降って—

サトウ、現れる。

サトウ こんにちは。

ゴトウ おお。

サトウ こんにちは。

ミュッキ ……。

サトウ こんにちは。

ミュッキ 君！（驚いて）僕が見えるようになったのかい？

サトウ 見えるようになったのかい？ へんなこというなあ。

ミュッキ ……。

ゴトウ どうだい、待ち人は現れそうかい。

サトウ ……私に間違えていたのかもしれませんが。夕焼けがきれいな日が三日続いてそのあと暖かい日が二日続いて雨が降った日の次にと、約束した、と先日申し上げたましたよね。

ゴトウ そうだったかな。

サトウ そうです。それで、よくよく思い出してみると、夕焼けがきれいな日が三日続いたあと暖かい日が二日続くんじゃなくて、うららかな日が二日続いて雨が降った次の日にと、約束したような気がするんです。

ゴトウ なんだって？

サトウ いいですか。夕焼けがきれいな日が三日続いてそのあと暖かい日が二日続いて雨が降った日の次にと約束した、と先日申し上げたのですが、よくよく思い出してみると、夕焼けがきれいな日が三日続いたあと暖かい日が二日続くんじゃなくて、うららかな日が二日続いて雨が降った次の日に約束したような気がするんです。

ゴトウ なに？

サトウ いいですか。夕焼けが一。

ゴトウ なるほど、わかった。

サトウ そうなんです。こまりました。

ゴトウ なにが。

サトウ え。だから一。

ゴトウ 暖かい日とうららかな日では全く違うな。そりゃこまった。サトウ ……とにかく、先日私は間違っ—

ゴトウ 確かに、昨日は雨が降っておとといはうららかだった。しかし、その前はどうか。暖かな日じゃなかったかね。

サトウ うららかな日でしたよ。

ゴトウ 暖かな日のような気がするが。

サトウ うららかでした！

ゴトウ そうか。じゃあ、まあそういうことにしておこう。天気なんて興味ない。

サトウ いま、何時ですか？

ゴトウ 十一時半だろ。

サトウ ……今日も私はふられたらしい。
ゴトウ そろそろお昼だな。腹が減ってるのに、まだなにも食べて ないからな。
サトウ さきおとといはうららかな日でしたか？
ゴトウ 暖かな日だったんじゃないか。
サトウ そうですね。暖かな日でしたね。

間。

ゴトウ まあ、気長にな。焦らずな。きっといいことあるよ。
サトウ え、ええ。
ゴトウ じゃあ、俺は帰って飯でも喰うよ。(ミュッキに) すまん な。相対性理論についてはこんど
ゆっくり話すよ。
ミュッキ うん。
ゴトウ ああ、そうだ、宿題忘れるなよ。
ミュッキ 分かった。
ゴトウ 俺もひとつ、面白いのを創ってくるから。
ミュッキ こんどは僕が分かる詩にしてくれよ。
ゴトウ (笑いながら去る)

時がスローモーションのように流れる。

場 ある部屋

サトウは一人でたたずんでいる。玄関のベルがなる。
新聞勧誘員のミュッキが現れる。

ミュッキ こんにちは。

サトウ 開いてますよ。

ミュッキ こんにちは。

サトウ どなたでしたっけ。

ミュッキ 集金に伺いました。

サトウ ああ。(財布を取りだそうとする)

ミュッキ すみませんねえ、日曜の午前中だというのに。寝ていら したんでしょう。

サトウ いや、増刊号観てましたから。大丈夫、おきてましたよ。 ところでおいくらでしょう。

ミュッキ いくらでも結構ですが。

サトウ へっ？

ミュッキ ですからいくらでも結構なんです。

サトウ なんの集金でしたっけ。

ミュッキ ゆうゆうライフです。

サトウ ゆうゆうライフ？

ミュッキ そう、二週間に一度お届けしてるコミュニティー紙です。

サトウ もしかして、ほとんどが広告ばかりで、どれが記事か宣伝 なんだか分からないあの新聞の こと。

ミュッキ ね、届いてるでしょう。

サトウ あれって、ただじゃないの。

ミュッキ ただじゃないです。

サトウ 入れてくれなんて頼んだ憶えはないよ。勝手にひとの家に 新聞放り込んでおいて、それは ないだろ。

ミュッキ でもあなたはお読みにになりました。

サトウ ・ ・ ・ 読んだよ。でも、読んであげたんです。だいたいじ ゃまなんです。ゴミになるんです よ、あれは。今後はいっさい入 れないでください。

ミュッキ ・ ・ ・

サトウ いいでしょう。今回の購読料は払いましょう。でも、金輪 際こんな詐欺みたいなまねしないで欲しいですね。よけいなトラ ブルは面倒だから今度だけは払いますけどね。

ミュッキ ちょっと待ってください。私は詐欺ではありませんよ。 私は集金に来ただけです。

サトウ だから、私はそのゆうゆうなんとかー。

ミュッキ ゆうゆうライフです。

サトウ ゆうゆうライフを入れてくれなんて頼んだ憶えは全くない っって言ってるんです。もちろん、 今後お金を出す気なんてさらさ らないですから。

ミュッキ ですから私は集金に来ただけですので。あなたが払いた くなければそれはそれでいいの です。我々はボランティアでやっ ているのですから。

サトウ ボランティア？

ミュッキ そうボランティアです。だからあなたがゆうゆうライフ を支えてくれる意志さえあれば 百万でも二百万でもいただきます。 しかし、その意志がなければ全く払わなくても良いのです。

サトウ じゃなんだ、私はその意志が全くないわけだからお金を出 す必要もない。

ミュッキ その通りです。

サトウ じゃ、お帰りください。

ミュッキ え。

サトウ 話は終わりですか。だったら、お帰りください。

ミュッキ いいんですか？

サトウ え？

ミュッキ あなたさみしくないんですか？

サトウ さみしい？ 何を言い出すんです。

ミュッキ お一人ですか？

サトウ あんたには関係ないでしょう。さあ、帰って。もう、やん なるな。

ミュッキ 一人で住むにはちょっと広すぎますね。奥さんは、お出 かけですか。

ミュッキはづかづかと部屋にさがりこむ。

サトウ えっ、そうです……。ちょっとあなたね。

ミュッキ あれ、ずいぶん長くおひとりみたいですね。

サトウ (不機嫌に) 実家に帰ってるんですよ。義母が、病気なん でね。

ミュッキ ヘえ。大変ですね、男独りで。ほら、パックがこんなに 捨ててある。ちゃんと栄養のある物を食べてるんですか？

サトウ 他人んちのごみ箱を見ないでくださいよ。なんて失礼なん だ。

ミュッキ うそでしょ。

サトウ えっ？

ミュッキ うそなんですよ。お義母さんが病気だなんて。本当は、 違うんですよ。

サトウ 何てことを。

ミュッキ いや、失礼、でも分かります。私も同じ立場でしたから ね、かつては。実はね、私もこのゆうゆうライフのボランティア をする前は、ひとりもなかったんです。でも、今はとても幸せに 暮らしております。ぶっちゃけた話ね、私はこーなんと言います か、胸の大きな女性が好きなんです。嫁にもらうならやっぱり胸 の大きな人でなくちゃね。ホソカワフミエみたいなタイプ、ちょ っと古いですか。最近フジワラノリカかなあ。もちろん恋人に するんなら違いますよ。スリムでなくっちゃね。アムロちゃんい いですね。結婚しちゃったけど。J Jのモデルなんてのも最高で すね。ウメミヤアンナなんてのもいいですよ、なにしろボンキ ュッポンですからね。ハガにはもったいない。……。

私は現在、フジワラノリカとアムロナミエ、ウメミヤアンナ、そ してスピードのヒロコちゃんをミックスして足して割ったような 純日本的なグラマーな女性と暮らしています。ほんと、ゆうゆう ライフのおかげです。

サトウ なにを一。

ミュッキ 実は3年前妻と死に別れましたね。ガンだったんです。 気づいたときにはあと1カ月の命。私は神様をお願いしました。

どうか妻の命を助けてください。私の命と引換でもいい、どうか 生かせてくださいましって。でも、駄目でした。医者が言った通 り四週間後には息をひきとりました。妻は私の全てでした。私の 生きがだったんです。妻がいなくなってもうなにをやっているか かわからなくなって……。私は酒に走りまわりました。でも何の解決に もならなかった……。私は何のために生きればいいのか。このま まいっそ死んでしまおうか。なんて思ったりなんかして。 仕事も手につかず、さみしくって、悲しくって、辛くって……。 (泣く)

サトウはミュッキにハンカチをわたす。

ミュッキはハンカチで鼻をかみ、サトウに返す。

ミュッキ ごめんなさい。ただ集金に來ただけなのに、こんなこと になって。ごめんなさい。見ず知らずの人の前でこんな姿を見せ てしまって、私は恥ずかしい。すみません。

(急に冷静に) では、私はこれで失礼します。ごめんくださいま せ。

ミュッキ、そそくさと帰ろうとする。

サトウ ゆうゆうライフのボランティアって何をやってるんですか？

ミュッキ えっ、いや。また、来月集金に伺います。そのとき気が 向いたらでいいんですが、よろしく お願いします。じゃ、どうも。

サトウ ちょっと待ってください。あなた、他人んちでさんざん泣 いてたりして急に帰らないでくださいよ。いまあなたが帰ったら 私は今晚眠れなくなるかもしれない。ゆうゆうライフっていった い何をやってるんです。

ミュッキ 新聞ですよ。

サトウ そりゃ知ってますよ。だから、その・・・新聞じゃなくて・・・それにともなう活動という か・・・ホソカワフミエとアムロナ ミエと何でしたっけ・・・たしたり、わったりしたような女性と 知り合えるような・・・なんというんですか・・・。

ミュッキ さみしいんですか？

サトウ えっ？

ミュッキ さみしいんですよ。

サトウ (不機嫌に) ええ、そりゃそうです。本当言いますと・・・実をいいますと、去年の夏、女房に逃げられましてね。別に上手くいってなかったわけじゃないんです。

むしろ、仲が良すぎたくらいでした。他人が羨ましがるほどうまくいってたつもりでした。ところがですよ。突然です。突然、いなくなっちゃったんです。会社から帰ってくると手紙が置いてありましてね。「私には待ってる人がいる。どうしても行かなくて はなりません。さようなら」これだけです。これっぽっち。5年も一緒に暮らしたのにですよ。「私には待ってる人がいる」これだけ書き残してどこにもいなくなってしまうんです。

(しみじみと) 私もね、どちらかと言えばグラマーな方が好きです。女房はコヤナギルミコによく似てたんですよ・・・。

おお、サチコー、サチコー帰ってきてくれ。なにが不満なんだ。なんでもするから、帰ってきておくれ。俺の生きがだよ。

(徐々に唄う) サチコー思い通りに、サチコー生きてごらん。

サチコー！

ミュッキはそっと帰ろうとする。

サトウ どこに行くんです？

ミュッキ いや、あなたはどうかやうやうライフには向いていないよ。さようなら。

サトウ あなた！ 待ちなさい！ あなたが今一緒に住んでいる女性、誰かと誰かを足して割ったような。いつ知り合ったんです？

ミュッキ きよっ、去年の夏頃でしたが。

サトウ やっぱりそうだ。そりゃー私の妻だ！ 返してください。私のサチコを。あんた！ 私のサチコをどこにかくしたんです。

ミュッキ なにをいってるんです。落ちついてください。偶然にも 私が今一緒に暮らしている女性はサチコっていいんですが・・・。

サトウ なんだって！ やい、泥棒！ 他人の女房を返しやがれ！（つかみかかる）

ミュッキ やめてください。私が一緒に住んでるのはもっと若くて ぴちぴちしてるんです。コヤナギルミコになんてまったく似てませんよ。わかります？

サトウ ってそれは・・・そんなことじゃだまされんぞ！（押さえつける）

ミュッキ 人違いですよ。苦しい。離してください。そうだ、写真 持ってます。彼女と一緒に写った写真があるんですよ。今年動物園に行ったときの。（懐から写真を取り出す）

サトウ あっ、俺の女房じゃない。（安心するが、急に慌てて）でも、今年撮った写真かどうかわからないぞ。ここにいるのは3年前に死に別れた奥さんかもしれない。

ミュッキ トラと一緒に写ってるでしょう。今年は寅年ですから今年とったものです。間違いありません。

サトウ トラのオリの前で撮ったんだからトラがいてあたりまえだろ。

サトウ、ミュッキをはがいじめにする。

ミュッキ そうだ、これ見てください。（携帯電話を取り出す） これ、先週一緒に撮ったものです。ほら。

サトウ え？ プリクラ？

ミュッキ そうですよ。プリクラです。これって最近でしょう。3年前はなかったでしょう。ほらこの右が彼女。そのとなりが私です。おまけに日付まで入ってるでしょう。先週一緒に撮ったものです、これは。

サトウ そうか・・・。（ようやくミュッキから手を離す）すみませんでした。たいへん失礼なことをしました。なんておわびしたら よいものですか。

ミュッキ いいんですよ。

サトウ 私、どうかしてました。すみません。

ミュッキ 本当に気にしてませんから。

サトウ いや、このままでは私の気がすみません。どうです。お食事でも一緒に。昨日のカレーの残りがあるんです。一人じゃ食べきれないんです。

ミュッキ 今朝ちゃんと食べてきましたから。

サトウ じゃ、お茶でもどうです。

ミュッキ もう行かないといけませんから。
サトウ お茶ぐらいいいでしょ！
ミュッキ ……では…いただきます。

サトウはミュッキにお茶をいれる。

ミュッキ ……おいしいです。
サトウ そうですか。（うれしそうに）

間。

サトウ ところで集金というのはどのくらいまわられるんですか？ ノルマなんてあって大変でしょう。

ミュッキ いや、集金というのはほんの名目です。実際に集金することもあります。本当の目的は違うんです。

サトウ なんなんですか。

ミュッキ （まじめに）愛を売るんです。

サトウ はっ？

ミュッキ ですから愛を売るんです。

サトウ 茶化さないでくださいよ。

ミュッキ （笑いながら）我々はボランティアですからね。といつても宗教団体と間違われてはこまる。私はニーチェと同じく無神論者ですから。我々ゆうゆうライフはもっとレンタルなものなんです。

サトウ レンタル？ メンタルじゃなくて？

ミュッキ んっ？…そうとも言います。現代社会で生きる我々につきまとう孤独感、疎外感、劣等感、などのいわゆるマイナスイメージの感覚を、連帯感、安定感、優越感のようにプラスの方向に仕向けるのです。

サトウ はあ。

ミュッキ 社会が大きくなり、複雑になった。昔のように混沌とした、いいかげんな状態では社会は運営できなくなってしまったのです。だから、組織に所属しない、一匹狼は存在できなくなってしまったのです。最近、一匹狼なんて気どっている人、見たことありますか？

サトウ そういえばいませんね、そんな人。

ミュッキ そうです。一匹狼なんて気取っているのは、この世の中わたっていけないのです。

こんなに社会が複雑なんですからね、あたりまえのことです。しかし、そこに大きな問題が生じたのです。

サトウ 問題？

ミュッキ そう、人々はこのシステム化された世の中にすっかり慣れてしまった。完全にシステム化された中で生活しないと不安さえ抱くようになってしまったのです。あなただってそうでしょう。

明日急に、会社からくびだって言われたら困るでしょう。

サトウ そりゃ、困りますね。

ミュッキ あなたは、なぜ会社で働いているのですか？

サトウ そりゃ、お金をもらうためですよ。

ミュッキ いや、そういう意味じゃなくて。なぜ、あなたは今の仕事、今の会社を選んだのですか？

サトウ 学校を卒業して、まあ、就職するのが当たり前だと思って。部活の先輩の紹介もあって…ただ、なんとなくここでやってみようかなと。

ミュッキ そうですか。ただ、なんとなくですか。

つまり、あなたの場合だと学校という組織から会社という組織へ移ったわけです。ところが、万ほどのシステムにも所属できなくなったとすれば、ものすごい不安に襲われるのです。もし、卒業前に就職の内定がでてなかったとしたらとても不安でしょう。

サトウ まあ、そうでしょうね。

ミュッキ そうです。とても不安なんです。だから、人は自ら無理矢理システムの一部になろうとする。組織に属することによって精神的に安定する。そこで社会のバランスが保たれるのです。もしも、バランスが崩れるようなことになれば、それこそ大変なことになります。

社会のバランスが崩れる、すなわち戦争がおこるのです。我々は20世紀末に起こった核戦争を再び繰り返すべきではありません。そうですよね？

サトウ あの戦争は思い出したくありません。

ミュッキ そうです。バランスが崩れ、安定が保てなくなると戦争 が起こるのです。平和がなくなってしまうのです。ところが最近、 戦後我々が再建してきたシステムの秩序を乱す者が現れ始めたのです。

秩序を乱す人間、つまり反乱分子は、システム内に潜んでいるんです。そしてシステム内の他の人々をエイズのように知らず知らずむしばんでいくんです。

サトウ どういうことですか？

ミュッキ 初期症状はこれです。組織に所属しながら不審に思い始め るんです。

例えばです。どうして俺はこの会社にいるんだろう。他にやりた かったことがあったんじゃないか？ 俺は今の仕事じゃなくて他 のことがやりたかったんだ。などと考えはじめてしまうのです。我々の調査によるとなんと72パーセントの人間が今現在の身分 に満足していないということです。これは、大変な問題です。

50年前にはこんな現象はまったく見られなかった。考えてもご らんなさい。社会を構成している約7割の人間が不満を持ちなが ら毎日をすごす。このことは現システム構造の崩壊に結びつく可能性がたいへん高いのです。革命さえ起こりかねません。

サトウ まさか、大げさな。

ミュッキ 大げさと思うのはあなたがまだ正常だからです。現シス テムに耐えうる人間だからです。ただし、少し修正が必要ですが。

サトウ 修正？ 修正ってどういうことですか？

ミュッキ 大したことはありません。環境を変えていただきます。

サトウ 環境を変えるって……。第一私にはそのシステムなんち ゃらなんて関係ないですよ。

ミュッキ 関係ありますよ。あなたはさみしかったんでしょう。

サトウ え……。

ミュッキ さみしいだけならいいんですけどね。あなたのまわりには危険な要因が多すぎるのです。つまり環境が悪いですよ。人 間さみしくなるとよけいなことを考えます。このままじゃいけない。自分を変えなければってね。勝手に自分を変えられちゃ困る んですよ。システムに乗っ取った方向でないかね。

我々の調査によるとあなたは間違った方向に変わろうとしていた。つまり反乱分子になる可能性があったというわけです。そこで、 私がその事実を確認するために派遣された。そこであなたは、黒と出た。反乱分子の予備軍だということが確認されたわけです。

サトウ そんな馬鹿な。私はたださみしいといっただけですよ。

ミュッキ それだけじゃありません。あなたは私を引き留めてお茶 の飲むように勧めた。

サトウ そりゃ、あんたが私の妻を……。

ミュッキ 修練所で更生していただきます！ そこで更生出来ない 場合、あなたは排除されます。

サトウ なんなんですか！ あなたはいったい何者なんですか？

ミュッキ ボランティアですよ。

ミュッキ、銃をとりだす。

ミュッキ さあ、行きましょう。安心してください。これは麻酔銃 です。ちょっと眠ってもらいだけですから。修練所ではあなたの 過去の必要ない記憶は消させていただきますが。なんてことはない。あなたは独身だったのです。女房なんて最初からいなかった。今 の仕事がとても好きだ、気に入っている。

サトウ あなた、警察呼びますよ。

ミュッキ やめなさい、無駄です。

サトウ、電話をとる。

サトウ もしもし！ もしもし！ すぐ来てください。ゆうゆうラ イフ、いや、強盗です。そうです強盗なんですよ。あっ！（切れ る）

ミュッキ 警察なんて来ませんよ。ゆうゆうライフは政府直属の正 式なボランティア団体ですからね。反乱分子撲滅のための。さあ、 じっとしててください。騒ぐとめんどうなことになります。首のところがちくっとするだけですから。

サトウ 狂ってる！ 私は善良な一般市民だ！ 誤解だ！ 私には なんの関係もない。

ミュッキ 関係ありますよ。さきほども言ったでしょう、あなたは 環境が悪かったって。それだけで

す。あなたが悪いわけじゃない。動かないでください。この銃はあたりどころによっては死ぬこともあるんですから。あなたの奥さんのようにね。

サトウ なにっ、サチコに何をした！

ミュッキ あなたの奥さんは反乱分子だった。しかし、我々が気づいたときにはおそかった、かなりの重傷だった。私は速やかに修練所に入られることをお勧めしたんですがね。

サトウ 殺したのか……。お前が殺したのか！

ミュッキ 私は組織の命令通り、任務を遂行したまでです。さあ、おだまりください。

ミュッキはサトウの首に麻酔銃を射つ。サトウの悲鳴。

場 ある場所

サトウ、倒れている。ミュッキ、登場。

ミュッキ おきなよ。おきなってば。こんなとこでねてたら風邪ひくよ。

サトウ、目が覚める。

ミュッキ しょうがないね、まったく。

サトウ ああ、撃たないで。やめて！

ミュッキ なんだ。寝ぼけてんのか。

サトウ・・・変な夢をみた。頭がガンガンする。

ミュッキ 夢？

サトウ そうなんだ。不思議だったな。今まで自分が経験したこともないような。盗みをしたり、人殺しをしたり、でも、すごいんだ。ものすごくスリルがあった。こんなに胸がドキドキしたのは初めてだ・・・。

初めて？ いや、どこかでこんなことあったことがあるような気がする。つい最近、本当に経験したような・・・。

ミュッキ (冷ややかに) 夢だよ。

サトウ 私は、いつからここにいるんだろう。

ミュッキ・・・。

サトウ なんだろう。私は、ここで何をしているんだろう。なにか、違うような気がする。かつて、いろんな人というんなとこで出会ったような・・・。そうだ！ 結婚していたんだ。なんかこうグラマーな女性と・・・。

ミュッキ あんたはずっとひとりきりだったよ。

サトウ そうだよな。私はずっとここにいるんだもん。それでおまえと知りあって・・・。そうだ、おまえと初めて会った日っていつだったか憶えてるかい？

ミュッキ 忘れちゃったよ。

サトウ 気づいたときにはおまえがいたんだよな。ん、待てよ。そうかな、その前になにか・・・。

ゴトウが現れる。

ゴトウ おう！

サトウ・・・あ、こんにちは。

ゴトウ どうだい調子は。

サトウ ええ、あいも変わらずってとこです。

ゴトウ そうかい。どした、今日はひとりかい。

サトウ ひとり？ いや、彼もちゃんといますよ。

ゴトウ え？ どこに。

サトウ あなたの目のまえに。

ゴトウ え？・・・。

ミュッキ (驚いて) おっさん、ぼくが見えなくなったのかい？

ゴトウ・・・あ・・・ああ、みえるよ。見えて当然でしょ、居るんだから。

ミュッキ ああ、驚いた。どう、詩はかけた？

ゴトウ 詩？ 詩はやめた。

ミュッキ どうして。

ゴトウ どうしてって・・・俺は、詩を書くなんてがらじゃなかつたからさ。

ミュッキ・・・。

ゴトウ どうだい。待ち人は現れそうかい。

サトウ 待ち人って？

ゴトウ あんたが言ってた人だよ。ここでほら、夕焼けがきれいな日が三日続いて、そのあとうららかな日が二日続いて雨が降った次の日に会うはずだっていった、あの人。

サトウ ああ、私はここで人を待っていたんですね。そうか、そうだったのか・・・。

ゴトウ なにあってやがるんだ。まあ、いいや。昔の俺もそうだったからな。でも、俺はもう違うんだ。ここにずっといただろ。時間は無限にあったし、いろんな事が考えられた。そこで思ったん

だ。・・・待ってるだけじゃ駄目だってね。待ってるだけじゃ、何にも変わらないってね。
ミュッキ アホなこと言うなよ。あんたはここで待ち続けるのさ。永遠にね。いままでだってそうだったじゃないか。

間。

ミュッキ ほら、きれいな夕日だ、平和だねえ。なにもない、戦争もない、食べる物にも不自由しない。このままでいようよ、ずっととね。

ゴトウ ああ、きれいな夕日だ。このままずっと、ずっとこのまま いられたらそりゃ幸せさ。今の生活は何一つ悪くない。

ほら、一番星だ。きれいだ、よくみるとちいさな三日月のようだ。あれは金星なんだろう。

ミュッキ・・・

ゴトウ あれをみるとなんだか勇気が湧いてくるんだ。あれが放つ光が俺を包み込んでスポットライトのようになる。俺は、マル コポーロのように大海原に出るんだ。子分を何十人も引き連れて。でっかい帆船の上に立って俺は叫ぶ。太陽のでっかいスポットを浴びて。俺は船長だ。海賊でもなんでもかかってこい！

なんてね。

(叫ぶ) ほほほーい。ほほほーい！

そうだ・・・冒険をするんだ。俺は冒険を待っていたんだ。船を作って海へでるんだ。

ミュッキ やめるんだ！

ゴトウ 俺は・・・俺は誰を待っているわけでもなかった！

あなたはゴトーさん？

サトウ いいえ。

ゴトウ そうだ。あんたがゴトーであるはずはない。ゴトーなんて最初からいなかったんだから。ゴトーは待っていても現れないんだ。

今日から俺がゴトーだ。

(自分で分で自分を抱擁する) んー。会いたかった。ゴトーよ。

こんなところにいたのか。

サトウ もしもし、ゴトウさん？

ゴトウ はい、ゴトウです！ 俺は俺を待っていた。昔、抱いていた、野心を、冒険の心を、あの時の自分を待っていたんだ。

俺は船乗りになりたかった。船乗りなんてそんな仕事、いまどき、はやらないし、みんなは笑うかもしれない。

15の時だった。中学卒業間近だった。俺は施設のおやっさん、そしてお袋さん、みんなの前で言ったんだ。中学を卒業したら船乗りになりたいって言ったんだ。するとおやっさんは高校くらいはいいおいたほうがいい。お前の将来のためだ。馬鹿なこと言っていないで、とっとと勉強しろって笑った。みんな笑った。軽く流された。俺も照れくさくなって一緒に笑ったさ。・・・でも違ったんだ。みんな馬鹿なやつだと笑うかもしれないけどさ、俺は本当に船乗りになりたかったんだ！

世界中を旅して廻る。それは全世界を廻るには一生かかるさ。一生かかってもいい。いろんな国の人と出会って、インディアンにも、エジプト人にも、そしてノルウェーのバイキングとも友達になる。あるとき、海賊に襲われる。でも、闘うんだ。自分の船は自分で守る！

船が嵐で沈没しそうになる、船長の俺は乗組員を救命ボートに乗せる。俺はボートには乗り込まない。自分の船と一緒に沈むんだ・・・。船が沈んで、俺は、海流に流される。何時間も何日間も。

そして、ある島に漂着する。そこで、島の娘さんと結婚するんだ。子どもが生まれる。三人程。長男は銀行員になる、次男は私と同じ船乗り、三男は、俳優にするんだ。

サトウ 長男だけ地味な仕事なんですね。

ゴトウ 長男は堅い仕事に就いてもらう。かわいそうだが将来俺達夫婦の老後を守ってもらわなくてはね。

サトウ それこそ親のエゴでしょう。

ゴトウ 長男というものはそういうものなんだ。それがどうしてもいやだったら、家をでればいい。

サトウ そうか。そうなんですよ。・・・あなたの話を聞いて、なんだか私も勇気づけられました。私も小さい頃からの夢を忘れていたような気がします・・・。

私には・・・私は実は・・・

ゴトウ なんだ。言ってみろよ。恥ずかしがることなんてない。

サトウ 私は・・・土木作業員になりたかったんだ。

ゴトウ 土木作業員？ 土木作業員って・・・あの。

サトウ でも、そのへんのドカチャンとは違いますよ。アスワンハ イダムとかエンパイヤーステートビルとか世界中の地図に乗るようなでっかい建造物を作るんです。山を切り裂いて川をせき止めてダムを作る。そこら辺のちっちゃな村なんかすっぽりと川の底に沈んでしまう。川の歴史が変わるんだ。すごいだろうな、人間の力で大きく自然が変わってゆく。それを横目に見ながら仕事する・・・。

あなたはゴトーさん？

ゴトウ そうだよ。

サトウ そうですか。やっぱりあなたがゴトーさんだったんだ。あなに会えてよかった。もうすこしであなたがゴトーであることに気がつかないでいるところでした。

私にもかつては夢がありました。でも、最近はずっかり忘れてしまっていて・・・かつて夢を抱いていたことさえも。

何故って、仕事が忙しかったり、結婚や子供の事があつたり、なにか言い訳をみつけて、自分の夢に向かって走ることを拒んできたんです。

夢に向かって走ることはとても勇気がいります。ときには、大切な物を捨てないといけなくなるかもしれません。でも、それに向かって走らないことにはなにも起こらないのです。なにも変わらないんです。

私は・・・地図に載るようなでっかいものを作る、そんな仕事がやりたかった。今みたいに九時から五時まで書類をさばっているだけの仕事でなく。もっと、もっとロマンのあるでっかいことがやりたかったんだ。

ゴトーさん！

ゴトウ ん！

サトウ やりましょう！ 我々の夢に向かってがんばりましょう。私はあなたを応援しますよ。

ゴトウ ありがとう。俺もお前を応援するよ。一緒に夢に向かって走ろうじゃないか。

サトウ そうです。走れ。夢に向かって！

サトウ・ゴトウ ん！

ミュッキ、短銃をかまえる。

ミュッキ 待ちな！ そんなことはさせないよ。ゴトウヒデオ！

ID 認識番号 J A 3 6 7 2 5 3 H。おまえを国家反逆罪、現行犯でここに処罰する。

ゴトウ おまえ何言ってるんだ。

サトウ まさか。

ミュッキ これは遊びではありませんよ。ゴトウさん、あなたの反逆歴はこれで5回目だ。国家安全保安法第17条、5回以上にわたる国家反逆は現行犯に限り射殺も可！ これより、あなたを処罰します。

サトウ やめてください。ぶっそうな物はしまってくださいよ。私たちは、いまやっと待っていたものがみつかったのです。それを反逆罪だなんて。

ミュッキ それが困るんですよ。あなた方の行為は現システムの秩序を乱すことになります。サトウさん、あなたはもう一度修練所にいってもらいます。更生後は、今まで通り組織から与えられた任務を遂行してもらいます。つまり、九時から五時まで書類をさばっていただきます。それができないようでしたら、死んでもらいます。あなたの奥さんのようにね。

サトウ なに！・・・あれは夢の中の・・・。そうか、お前が殺したのか。妻はお前が殺したんだな！

ミュッキ・・・ゴトウさんあなたはここで死んでもらいます。私だって好きであなたを殺したいわけじゃない。あなたの監視を任命されてからあなたの記憶が戻らないことを願った。でも、あなたは思い出してしまった。残念です。

ゴトウ おれは、なにもしちゃいねえ。俺は自分に正直に生きてきただけだ。

ミュッキ いいですか、ゴトウさん。ここまできたらしっかり思い出してくださいよ。あなたは船乗りになりたかった。その夢のために何回盗みを働きましたか。何人ひとを殺めましたか・・・。あなたはもう国家の手におえません。修練所に送って更生するには及びません。覚悟はいいですね。

ゴトウ 畜生！ はやく殺れ！

サトウ ああ！（サトウ、ミュッキのすきをみて飛びかかる）

乱闘。

ミュッキはとても強く、サトウ、ゴトウは地面に転がる。

ミュッキはゴトウに銃口を向け、撃とうとする。
サトウはナイフを取り出しミュッキの首に突きつける。

サトウ やめろ、銃をすてねえと命がないぜ！

ゴトウ よせ！ ナイフを捨てるんだ。おまえはまだ初犯だ。いま なら修練所へ行くだけですむ。
ミュッキ やめな。俺を殺したところでなんにもならないさ。政府 直属の職員を殺してみろ。極刑は免れないぜ。

ゴトウ 捨てろ！ 捨てちまいな。いいじゃねえか、俺みたいな者 を助けなくても。俺は、これでいいんだ。修練所で脳ミソいじく られて別人間になってしまうくらいなら死んでしまった方がましだ。俺は俺の人生を自分で決める。

サトウ 違う！ 俺はおまえを助けたいわけじゃねえ。俺は俺のためこいつを殺るんだ！ こいつを殺ることによって俺自身の冒 険が始まるんだ。俺の初めての冒険が！

ゴトウ サトウ！ 止めろ！ 止めるんだ！ お前の女房は夢を抱 いたために死んでしまったんだぞ。おまえにはできねえ。おまえに はできねえんだ。直方の施設の頃からずっとそうだったじゃねえか。

サトウ いや、俺にはできる。見ててくれ。ゴトちゃん、見ててく れよ。こんどこそ俺にはできるんだ、15年前、お前が火をつけ たのと同じようにな。

小さい頃からおまえはすごかったよ。何でもできて、自分のやり たいことは必ず実行する。俺はうらやましかった。でも、俺には できなかった。恐かったんだ。自分が変わるのがとても恐かった んだ。でも、でも今はできる。

ゴトー！ 見ててくれ！ 俺はこれで変われるんだ。

これが俺の晴れ姿だ！

サトウはミュッキを刺す。

ミュッキの悲鳴。

暗転。

場 月面のバー

ピアニスト（歌手）が演奏している。

サトウ、座っている。

女の姿をしたミュッキが現れ、辺りを見回す。

ミュッキ すみません、いま、何時かわかりますか？

サトウ お昼前じゃないでしょうか。

ミュッキ はあ。

ミュッキはイスに座る。

ミュッキ すみません、火ありますか？

サトウ 私は煙草は吸わないんです。他のものなら毎日吸ってます がね。

ミュッキ ……。

間。

ミュッキ あなたはゴトーさん？

サトウ ！

暗転。

—幕—